

豐岡市史

下
卷

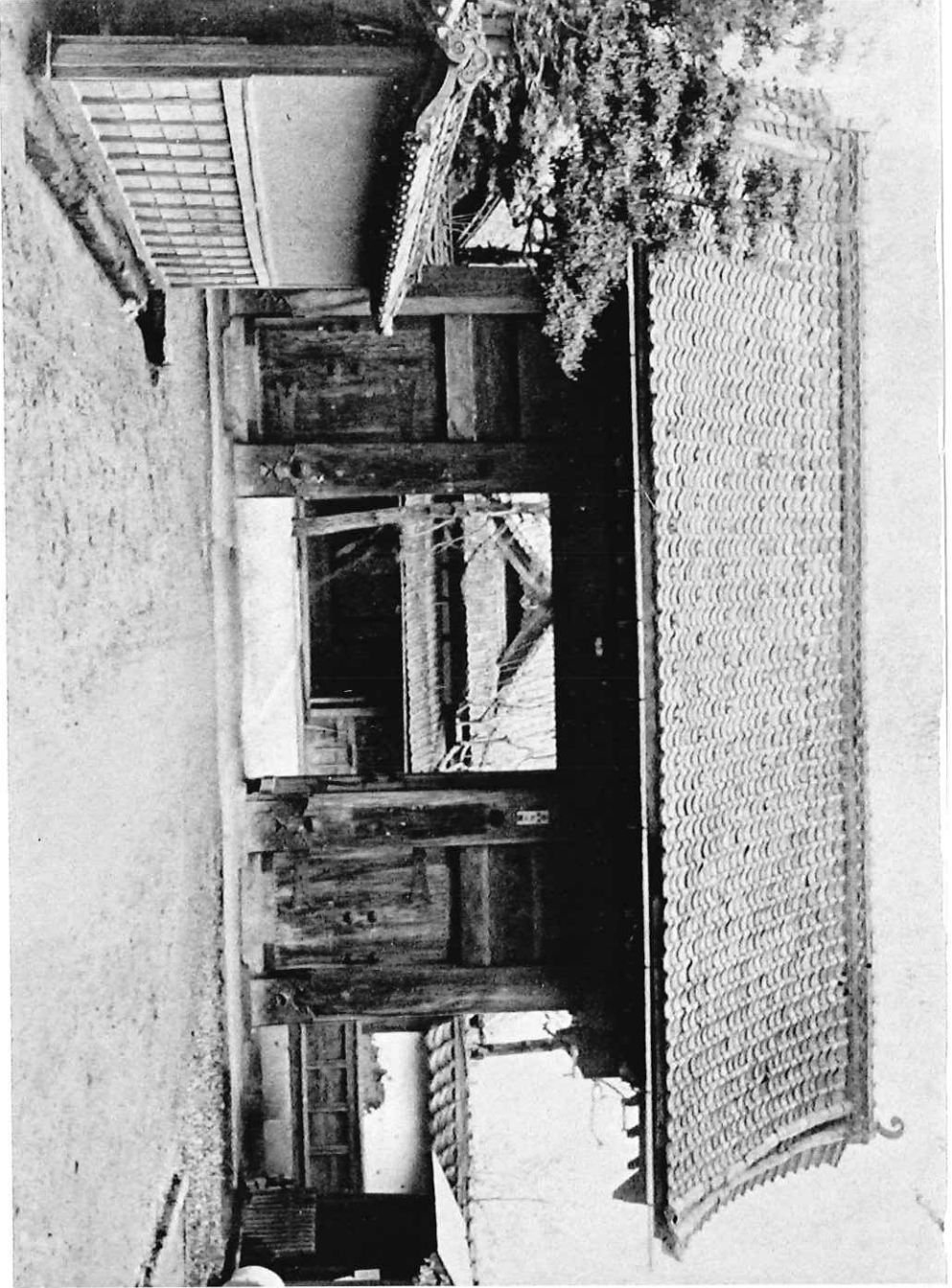


九日市上空から見た豊岡市街全景



豊岡県庁舎

正門を含めて旧久美浜県庁の庁舎を移したもので、城崎郡役所に転用され、郡役所建てかえのとき再び久美浜に戻ったが、正門（市指定文化財）は残った。稲垣喜三氏提供

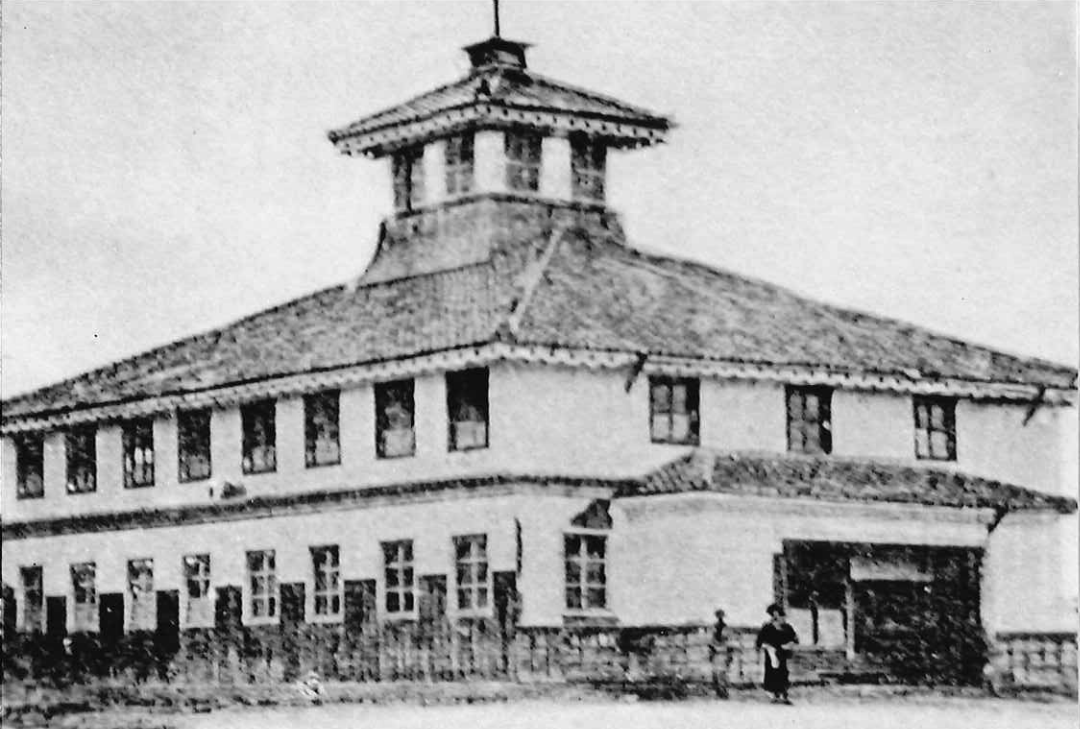




晩年の京極高厚肖像（京極家提供）

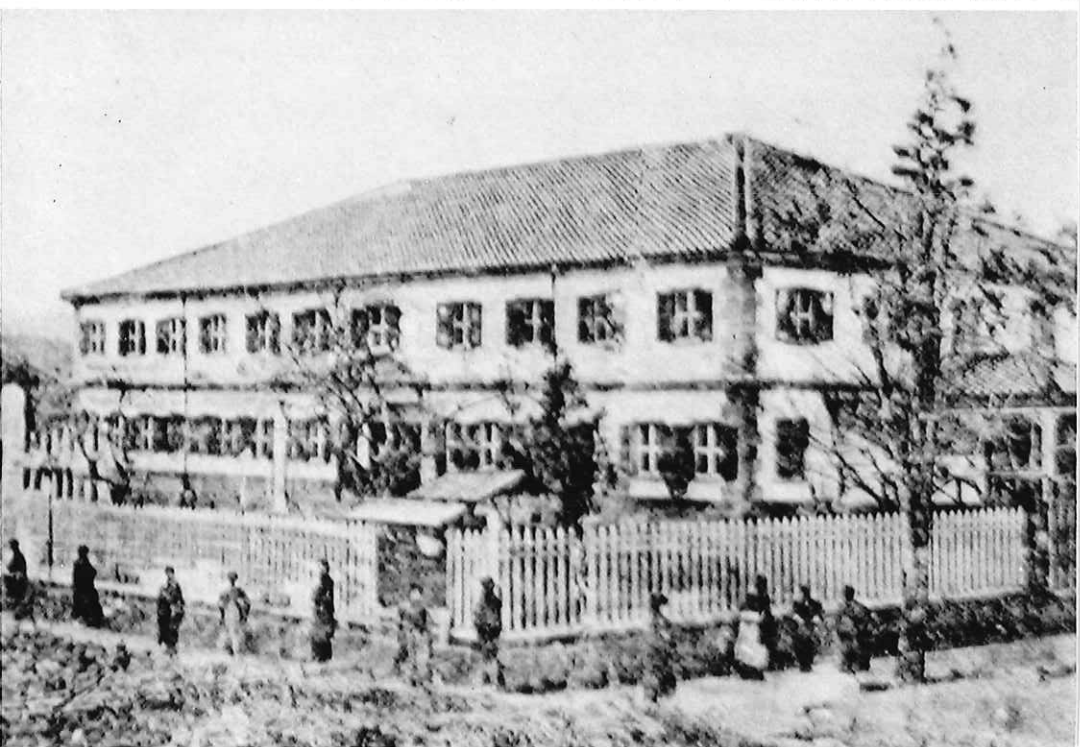


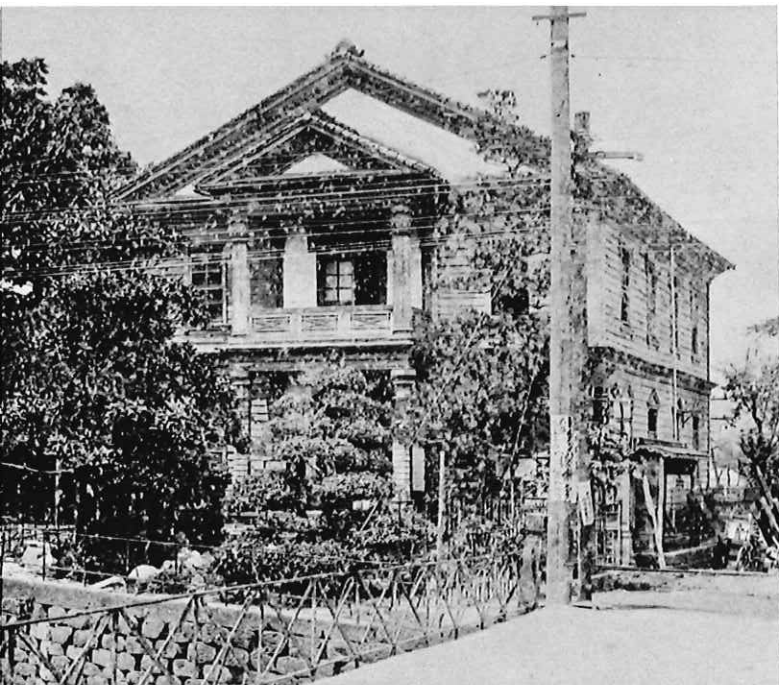
安政元年、浦賀奉行与力時代の
田中光儀（豊岡県参事）
（東村山市・志村豊志郎氏提供）



初期の豊岡小学校校舎（明治8年）

豊岡県師範学校校舎 後に公立豊岡中学校、さらに豊岡高等小学校校舎に転用された。

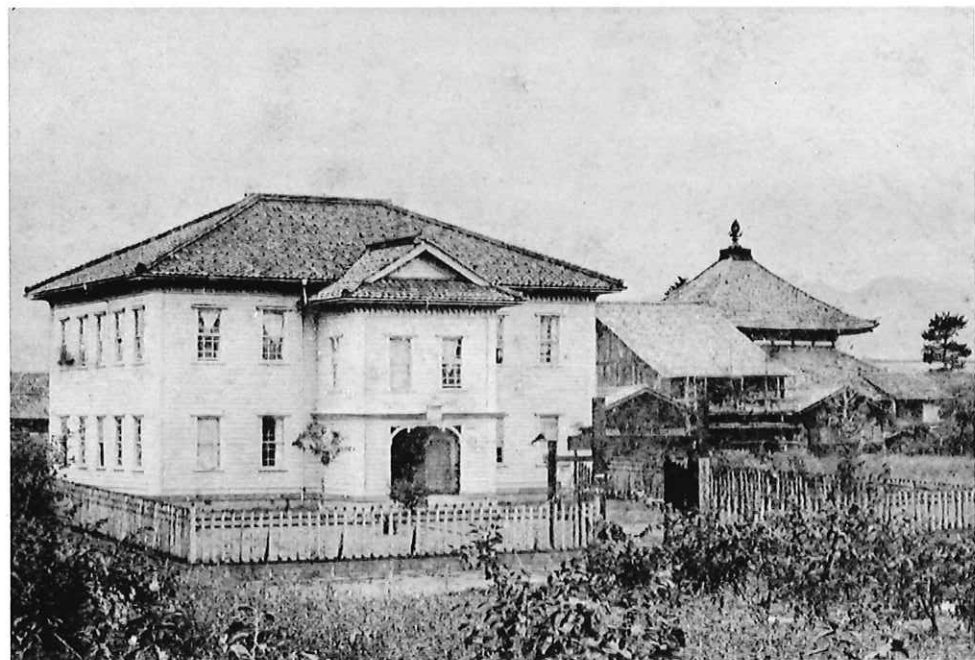




豊岡町役場
明治23年、寺町に完成。震災後に移築して
関西配電社屋となった。手前は堤橋。

城崎郡公会堂

現在のマルエー・マーケット付近にあった。
背後は来迎寺。(明治40年)





明治42年に開設された豊岡駅



達徳会館（明治29年建築。県立豊岡高校構内。市指定文化財）

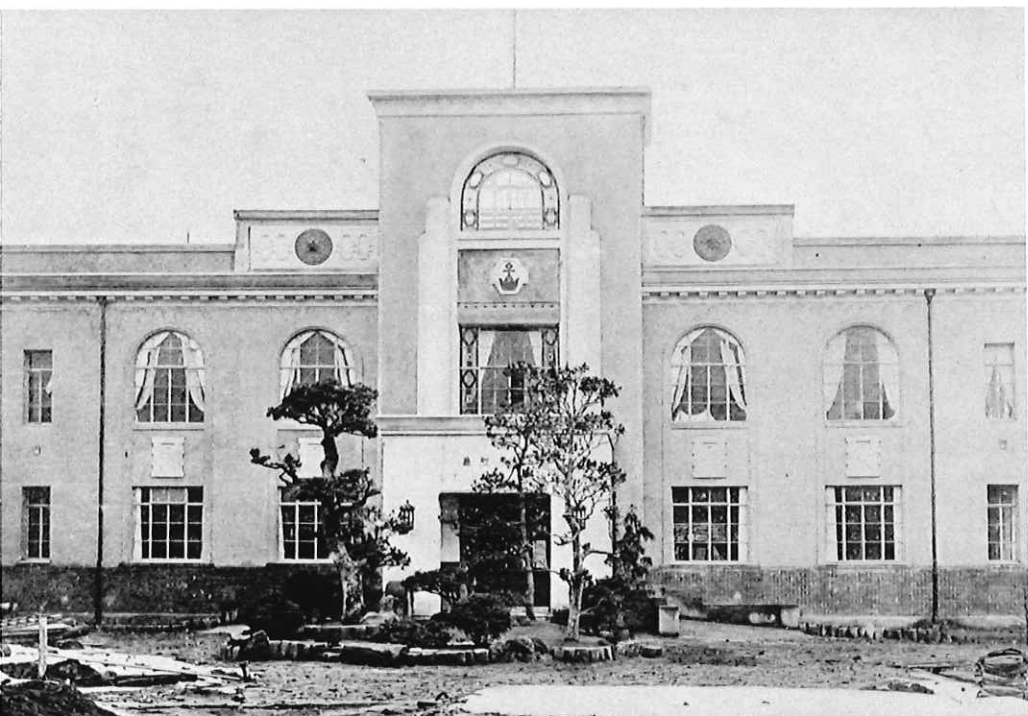


北但大震災で炎上する豊岡の町並み

左端部の小田井は焼けていない。寿ロータリー斜線の建設及び円山川改修工事(矢印)が進行中であることがわかる。(大正14年5月23日午後3時)

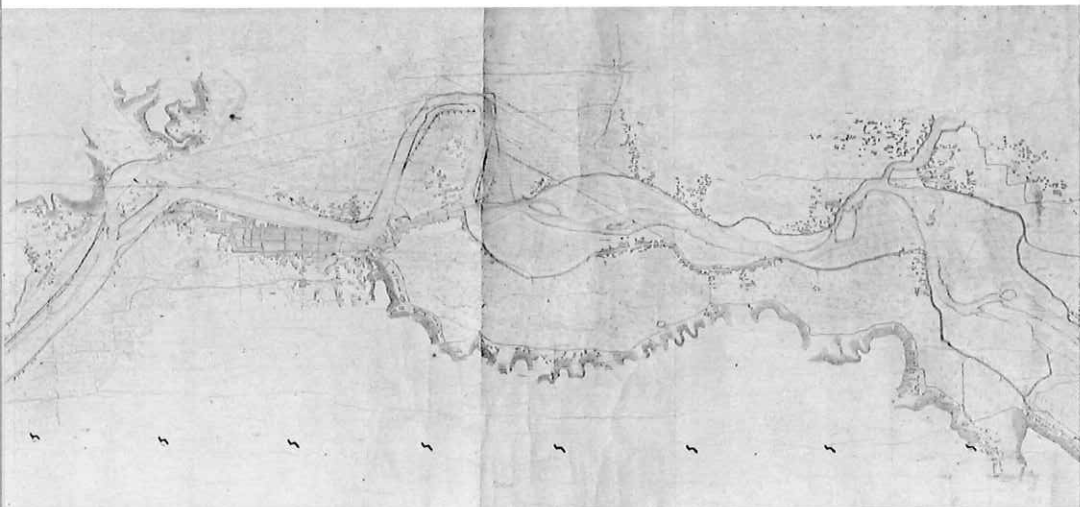


同じく港西地区

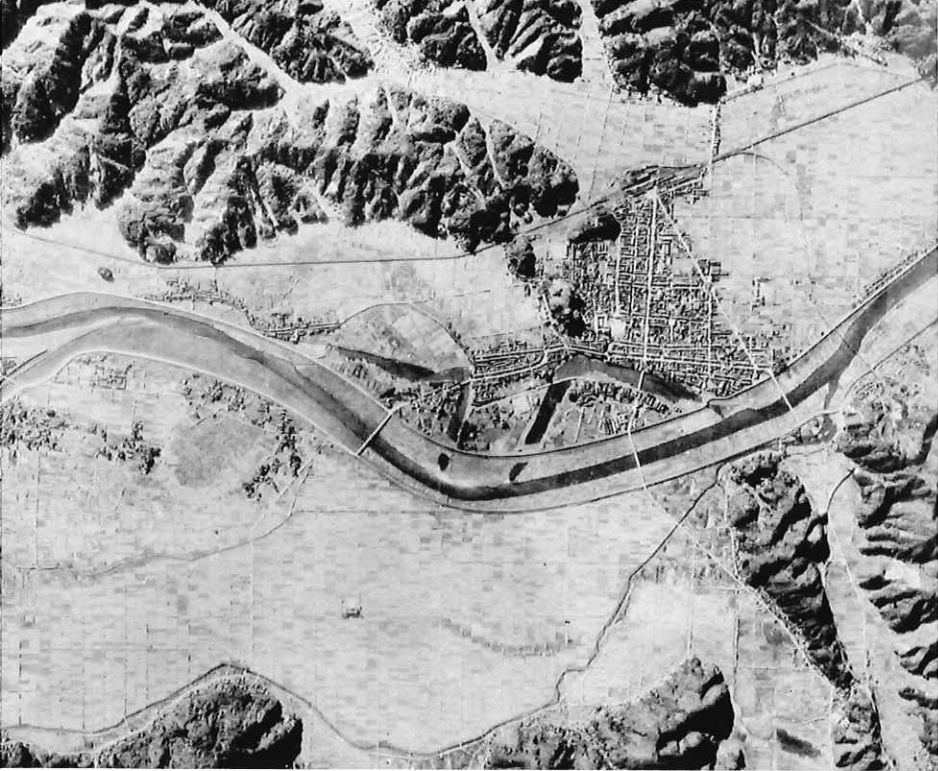


昭和2年完工した豊岡町新庁舎

円山川改修計画測量図（遅くとも明治28年以前に実測されたもの。上が東）



市街を中心とする航空写真



昭和二十一年



昭和五十一年

発刊のことば

歴史はあたかも流水の如くよどみなく流れ去り、繰り返し繰り返し新なる時代を創出していきます。

本市では、昭和五十六年に古代から江戸末期までを集成した豊岡市史上巻を刊行いたしました。したが、このたび明治以降から現代までを収録した下巻を発刊するはこびとなりました。

明治維新の時、豊岡藩が廃された後、たとえわずかな期間にせよ、但馬・丹後、丹波（うち三郡）を管下とする豊岡県が設置されたことは、現在の豊岡への大きな方向づけでした。

また、明治末から大正・昭和のはじめにかけては中・女学校の開校、山陰鉄道豊岡駅の開設、円山川下流域の大改修、市街地の区画整理、津居山港の改修などが骨格となって、今日みる北兵庫の中核都市「豊岡」が成り立っているといっても決して過言ではありません。

このように、私たちの先人が地域の自立意識に支えられて、繰り返しひろげたまちづくりへの情熱に深く思いをめぐらすとともに、今に生きる私たちはふるさとを愛し、育て、これを二十一

世紀に向けてさらに展開させる責務を痛感いたします。

このたび発刊いたします市史がより多くの方々に愛読され、羽ばたく豊岡のための心の糧となることを切望してやみません。

おわりに、昭和五十二年以来、一〇年の長きにわたり本務のかたわら精力をかたむけて本市史の執筆・編集に当たっていただいた委員各位のご労苦に深甚なる謝意を表するとともに、お力添えをたまわった先学の諸先生並びに資料提供などご協力をいただいた市内外の多くのみなさんに厚くお礼を申し上げます。

昭和六十二年三月

豊岡市長

平尾源太夫

凡例

一、豊岡市史は上巻（幕末まで）と、下巻（明治以降）の二巻、及び資料編となる予定であるが、この巻はその下巻である。

一、本文の記述は、原則として当用漢字・現代かなづかいによった。ただし、歴史用語・学術用語・人名・地名などの他、一部これによっていないところがある。読みにくい漢字には、なるべく初出のところでふりがなをつけた。

一、数字の表わし方は、原則として次の例によった。

一〇軒・二三歳・三六個・四万三五七〇人・数千円（基数）

（ただし、十台に限り「十一歳・十八冊」と表記）

二十三番目・明治十四年（一八八一）六月二十三日（序数）

一、引用した史料の出典・文献名は、原則として『』でかこみ、引用記述の末尾に紹介するようにつとめたが、頻出する場合など、これを省略したものもある。研究成果や談話の紹介においても同じである。

一、人名は原則として敬称を略した。

一、文中の図・表・写真には、それぞれ一連番号を付けた。また巻末にこれらの一覧表をそえた。

一、日本年号には、その下の（ ）内に西暦年を付した。ただし、頻出する場合は年号及び西暦年を適宜省略した。

豊岡市史 下巻 目次

第一編 明治の豊岡

第一章 明治維新と豊岡

第一節 豊岡藩の新政府帰属

山陰道鎮撫使の廻来 生野代官支配地の接收 藩主の新政府出仕

桂御所の警衛 藩制改革と藩治職制 摂津丸入港修理

第二節 転換期の豊岡藩制

版籍奉還 岩崎豊の郡県制論 久美浜県設置と三丹執政会議

相次ぐ社会不安と不穏 職制改革 明治初年の藩財政 最後の切腹

第三節 豊岡藩から豊岡県へ

廃藩置県 町方行政機構の改革 壬申戸籍の編制

第四節 改置豊岡県の成立

三丹一県に統合 県庁設置の意義と理由 新県への引継ぎ

県庁舎の設営 県庁機構と職員構成 歴代県令と田中光儀参事

大小区制の実施とその後の推移 豊岡浚疎会社と弘商会所

第二章 近代化への歩み	
地方官會議に人民惣代	田中參事の免官
藩札の消却と通貨の統一	旧藩士の去就
検稻一件	會計不明朗事件
田中參事の免官	
旧藩士の去就	
検稻一件	
會計不明朗事件	
第一章 兵庫縣への編入	53
豊岡縣から兵庫縣へ	郡役所と戸長役場の設置
町村制施行と町制実施	町村會議員の等級選挙
町村連合会の結成	郡制施行
連合戸長役場と町村連合会	
第二章 自由民権運動	63
国会開設運動の波及	広益和談会と強成社
但馬自由党の結成	和田垣信の活躍
但馬自由党の退潮	
第三章 明治後期の推移	71
明治後期の豊岡町	町村人口の動態
町村財政の窮迫	
第四章 政党勢力の消長	75
政党勢力の町村浸透	立憲政友会と憲政本党の角逐
立憲政友会と憲政本党の角逐	うずまく党利党略
第五章 大衆的社會への胎動	81
郡町村連合会決議反対騒動	日露講和反対但馬國民大会
日露講和反対但馬國民大会	
小作地支配人告発事件	町長・助役排斥運動
町長・助役排斥運動	地代引上反対同盟

第三章 明治期の産業・経済

第一節 秩禄処分と士族授産

秩禄処分 士族授産 宝林社 拓産社 豊成社 開成社

87

第二節 新通貨発行と殖産興業

金札発行 金札強要 賈金横行 藩札始末 豊田町の誕生
殖産興業 在来産業(杞柳業) 銀行の設立

102

第三節 陸海交通と通信

渡船 橋梁 道路 助郷 陸運会社 回船業 船改所
弘商会所 魚せり場 郵便 電信電話

120

第四節 水産業

港地区の概況 港村の漁業 明治時代の漁獲高 漁業税 漁業紛争
海藻採取紛争 漁業技術の伝習 漁船改造の奨励 港村漁業組合の結成
円山川漁業のあらまし 中郷の鮭漁 開成社による鮭養殖

144

第四章 明治期の農業

第一節 用水路の開発

新川用水 助成歎願 江本・今森への分水 府中その他への分水
昭和の大改修

161

第二節	地租改正	169
	封建的土地制度から近代的土地制度	
	収穫量引上げ指示	
	農民の抵抗	
	壬申地券の交付	
	地租改正の実施	
	その後の経過	
第三節	農談会・農会	180
	勸産肝煎	
	農談会	
	農会	
第四節	養蚕と畜産	184
	養蚕国但馬	
	蚕種改良	
	養蚕の普及	
	牧牛大意	
	農耕用貸牛	
	繁殖事業	
	洋牛飼育と食肉	
第五章	明治期の教育	
第一節	学制前の学校	193
	豊岡藩女学校	
	立正寺小学校	
第二節	学制公布と小学校開設	197
	学制の公布	
	豊岡県の対応	
	豊岡小学校開設	
	市内小学校の開設	
第三節	草創期の教育事情	207
	創業期の学校要覧	
	学校分合	
	初期の学校と就学状況	
	教育の内容	
	教員の実態	
	豊岡県の教育財政	
第四節	師範学校と中学校	221

教員伝習所 豊岡県師範学校 城崎美舎(郡)豊岡伝習所
 但馬国公立豊岡中学校 宝林義塾
 第五節 初等教育の進展……………228
 学制から教育令へ きびしい試験制度 簡易小学校と高等科
 国家主義と学校儀式 就学率の推移と授業料 学校教育の近代化
 豊岡幼稚園の設立

第六節 明治後期の中等学校……………238
 兵庫県豊岡尋常中学校の設立 創業時代 私立窈淑女学校の開設
 城崎郡立高等女学校創立 『但馬新聞』と女子教育

第六章 明治期の生活と文化

第一節 宗教と戸籍……………248

論社 神葬祭 戸籍改めと氏子札 キリシタン解禁 キリスト教の伝道
 第二節 医療と衛生……………257
 医療 種痘 伝染病 衛生 豊岡病院

第三節 兵役……………270
 軍制の確立 西南の役 日清戦争 日露戦争

第四節 北海道開拓移住……………286

貧窮士族の建白 北海道開拓

第五節 近代交通の胎動

鉄道敷設への動き 播但鉄道 人力車と舟 列車の旅 山陰縦貫鉄道

山陰山陽連絡線 豊岡駅の発足 宮津線の完成

第六節 豊岡の俳壇

明治前期の俳壇 俳誌『俳諧吹寄松葉』 俳誌『木兎』と由利由人

第七節 近代のやきもの

倉谷溪司と市内の近代陶業 瀬戸焼 前期三宅焼 後期三宅焼 豊山焼

第八節 治安

警察 監獄 裁判所 検察 代言人と弁護士 事変と禁令

第二編 大正・昭和前期の豊岡

第一章 近代化の波

第一節 円山川改修

円山川 治水前史 堤橋一件 円山川改修 津居山港の改修

第二節 電気・水道・都市ガス

電気 電気その後 上水道 中江種造 都市ガス

338

325

313

307

302

290

第二章	震災及び大豊岡構想の形成と展開	
第一節	第一次大戦の好況と大豊岡構想	351
	由利伊地智町政	大豊岡構想の進展
	村部の事業と財政	豊岡町財政の膨脹
第二節	北但大震災	357
	無震地方の大震災	罹災復興対策
第三節	震災後の大豊岡構想	364
	豊岡町の復興路線	村部の復興路線
	転変する地名	街並みの発展
	耕地整理という名の都市計画	
第三章	大正デモクラシーと地方行政	
第一節	普選と町政刷新運動	379
	大正四年の総選挙	大正九年の総選挙
	若宮貞夫の当選と青年党	郡道の県道編入問題
第二節	米騒動	386
	米騒動の前提	盆踊りと米騒動
	家賃引下げ問題	
第三節	自主青年団と但馬青年学生連盟	390
	自主青年団	但馬青年学生連盟

第四節	行政当局の大正デモクラシーへの対応……………	393
	民力涵養運動 城崎郡実行概目 国民精神作興運動	
第五節	震災復興と罹災民会・復興同盟会……………	396
	罹災民会と復興同盟会 行政当局への要求と批判	
第六節	労働農民党但馬支部の形成……………	400
	労働農民党支部の成立 労働農民党但馬支部と豊岡町青年団 労働農民党支部の活動の停滞	
第四章	不況の深刻化と戦時体制の形成……………	405
第一節	震災復興事業と豊岡町政革新運動……………	405
	昭和二年度豊岡町予算 豊岡町政革新運動 縁装労組のスト 三・一五事件まで 日本プロレタリア文化連盟	
第二節	昭和恐慌と町村財政……………	411
	豊岡町財政の窮乏 港村会の減税要求 公私経済緊縮運動	
第三節	商工会の電燈料金値下げ運動……………	417
	運動の要因と経過 運動の収束	
第四節	豊岡町と近隣村落の合併……………	420
	八条村と新田村立野 三江村と田鶴野村	

第五節	産業立町構想と非政党熱……………	425
	産業立町構想 豊岡町長後任問題 町長後任問題の紛糾 後任問題の結着	
第六節	戦時体制の形成と挙町一致……………	431
	選挙粛正運動 大政翼賛会と翼賛選挙	
第五章	戦前戦中の産業	
第一節	杞柳業の盛衰……………	435
	新時代の杞柳業 製品の改良 震災の影響 不況下の杞柳業	
	戦時体制下の杞柳業	
第二節	金融恐慌と銀行の合同……………	451
	銀行法の制定 銀行の合同	
第三節	商工業の発展と商工会……………	454
	商工会の設立 好況と不況 工場誘致 戦時統制 信用組合の発展	
	鉱業	
第四節	近代化する漁業……………	467
	沿岸漁業と沖合漁業 サバ漁業 サバ縄 イワシ漁業 イカ漁業	
	イルカ漁業 機船底曳網漁業 漁船の発達 母船式操業 魚行商 遭難	
	漁業組合の変遷 保証責任港村漁業協同組合の設立 港村漁業会 中郷の鮭漁	

第五節	農業の発展と前近代的農村構造……………	483
	豊岡地方の大土地所有 親方子方制度と前近代的な村法	
	小作争議の発生と耕地管理組合 耕地整理事業の進展 養蚕業の消長	
	和牛飼育の発達 農会と農業会 農村不況と経済更生運動	
第六章	前線と銃後	
第一節	満州事変と日中戦争……………	511
	戦時体制への突入 郷土部隊の動向 忠霊塔の建立	
第二節	太平洋戦争……………	515
	戦時下の諸相 戦局傾く 北但地方事務所の設置 国家総動員	
	敗戦の経過 戦没者の手紙	
第七章	教育・文化・社会	
第一節	中等教育の普及……………	524
	進学熱の向上 豊岡商業学校の発足 教員養成所の設置	
	豊岡農学校の設立	
第二節	初等教育の推移……………	530
	自由主義的教育の展開 高等科増設と幼稚園 震災の被害	
	国家主義の復活と郷土教育 皇道教育と軍国主義	

次
第三節 補習教育と社会教育……………540

青年夜学会と教育召集 青年会 実業補習学校 青年訓練所の併置

豊岡商工実修学校 青年学校の発足 青年団の発足と活動

処女会から女子青年団へ 婦人会の成立とその事業

第四節 戦時下の学校……………553

戦争の拡大と軍国教育 国民学校と決戦体制 青年学校の統合充実

豊岡商業学校の転換 臨戦体制下の中等学校 学童疎開の受入れ

第五節 文学と美術……………563

島崎英彦と歌誌『さつや』 俳句同好会「蓼川会」 彩人会と青踏社

第六節 ブラジル移民……………567

不況と農村対策 但馬の移民 移民の生活 豊岡からの移民

アルゼンチン移民、他

第七節 その後の豊岡病院……………572

豊岡病院の移転 県営移管問題

第三編 現代の豊岡

第一章 戦後の地方行政

第一節	地方行政の民主化……………	579
終戦と豊岡	公職追放と選挙	
部落会・町内会の解散		
第二節	警察と消防……………	583
豊岡警察署	消防組・警防団・消防団	
豊岡消防署		
第二章	豊岡市制の施行……………	
第一節	町村合併への動き……………	589
北但都市構想	豊岡市制への胎動	
第二節	豊岡市制の施行……………	592
豊岡市の誕生	市章と市歌	
第三節	豊岡地域の拡大……………	596
奈佐村・港村との合併	神美村穴見谷地区の合併	
日高町上佐野の合併		
第三章	社会保障と福祉行政……………	
第一節	福祉行政……………	605
戦後の救貧と母子対策	福祉行政の展開	
民協と社協	国保と国民年金	
第二節	同和行政……………	610
同和行政の推移	同和行政の課題	
同和教育の進展		
第四章	戦後の農業と水産業……………	

第一節 農民組合の結成……………	615
戦時中の農地解放要求 豊岡町農民組合の結成 豊岡町農民組合の活動	
共産党系農民組合の叢生 日農と全農に分裂 日農系組合の税金闘争	
第二節 農地改革と農村の民主化……………	621
農地改革前史 第一次農地改革 第二次農地改革 農地改革の成果	
農地補償 伊賀谷開拓団	
第三節 変貌する農村……………	630
米供出制度から予約買付制度へ 兼業農家の急増	
新農村建設事業と農業青年研修所 自立農家と構造改善事業	
第二次構造改善事業 土地改良事業	
第四節 豊岡市農業協同組合……………	639
農業会から農協へ 豊岡市農協の誕生 合併後の歩み	
第五節 戦後の養蚕・畜産・林業……………	642
養蚕業の復活 屋外糸桑育と桑園改良 養蚕業の衰退 畜産 林業	
第六節 戦後の水産業……………	649
漁獲高の推移 漁業協同組合の発展 水産加工業 造船業	
漁具製造業 河漁と河川問題	

第五章 商工業の発展

第一節 鞆産産業などの推移

商工業の復興 柳行李から鞆へ 近代化をめざして

金融再編成 産業構造1 産業構造2 低成長に抗して

中核工業団地の推進 流通 山陰海岸国立公園 日和山

第二節 戦後の労働運動

戦前の労働運動 戦後の労働運動 苦悩する労働運動

但馬労働会館の建設 労働運動の転変

第六章 現代の教育と宗教

第一節 教育制度の改革

戦時教育体制の解体 新制小学校の教育 育友会結成

新制中学校の誕生 青年学校廃止 新制高等学校の発足

定時制高校と通信教育部 県立豊岡壘学校の設立 教育委員会の発足

第二節 新教育制度の充実発展

戦後教育の特色 豊岡教員養成所の設置 近大付属女子高・短大誘致

豊岡農高の普通科転換

第三節 戦後の社会教育

戦後の社会教育..... 711

次

目

新生青年団と青年学級	再生婦人会と婦人学級	P T Aの発足
その他の社会教育団体	公民館の発足	社会体育の概況
第四節	現代の宗教	720
近代以降	大本	おやまのつとめ
金光教	大卒光の道	天理教
カトリック教会	エホバの証人	福音教会
立正佼成会	専修念仏	念法真教
紫光学園	神道親導教	
世界救世教	日本基督教団	
モルモン教会	創価学会	
第七章	文化と社会	
第一節	戦後の文学と美術	730
京極杞陽と再刊『木兎』	青玄俳句会と雪線短歌会	戦後の美術活動
豊岡書道界		
第二節	戦後の豊岡病院	739
外観と内容を一新	経営診断	伝染病棟の統合
第三節	鉄道と空港	741
戦後の鉄道	但馬空港計画	
第八章	戦後の街づくり	
第一節	新住居表示	743

住居表示の変更 消えた歴史地名

第二節 都市計画

用途地域の決定 公園・緑地と市営住宅 下水道

第三節 道路

戦後の道路開発 むかし道 港大橋

第四節 円山川・津居山港修築

津居山港 円山川改修 廃川

第九章 豊岡市の課題

人口と産業構造の変遷 将来への展望

編外

1 出身人物略伝

藩費遊学生 下村家と久保田家 久保田精一 猪子清 塩井雨江

堀田瑞松 吉村寅太郎 神谷肅一 和田垣謙三 沖野忠雄 浜尾新

西村輔造 森垣亀一郎 久保田讓 神月徹宗 河本重次郎 下村三四吉

池口力蔵 一瀬兼吉 秦慧昭 猪子止戈之助 岡本梁松 大橋光吉

木村尧 若宮貞夫 古島一雄 竹中政一 紫安新九郎 日下義禪

769

760

757

750

747

目 2 民俗

舟越楫四郎 赤木正雄 小場瀬卓三 藤井重夫 木下保 秦慧玉
 大江保直 李田たけを 加藤美代三 森田子龍 岸田俊子

第一章 衣食住

第一節 衣生活

和服から洋服へ 赤ん坊の着衣 子供の着衣 大人の着衣
 被りもの 履物 髪形 寝具 織布・染色、その他

第二節 食生活

食事の習慣 平常の献立 ハレの日の食事 調味料と保存食
 間食・菓子・嗜好品 山や川の食べ物 共同飲食

第三節 住生活

屋敷 母屋 間取り 衛生検査 屋根の葺き替え 照明

第二章 年中行事

第一節 正月

三ガ日 シメノウチ

第二節 盆

旧の盆 盆踊り

823

821

821

817

811

805

805

804

第三節	祭	825
	八社宮神社	餅まき
第四節	秋し	826
	稲刈り	庭上げ
第五節	大年	832
	年徳さん	除夜
	※八社宮という地名	
第三章	人の一生	833
第一節	産育	833
	妊娠	出産
		足洗いと命名
		宮参り
		食い初め
		初節句
	初誕生	子供の成長と祝い
		厄年と年祝い
第二節	婚姻	837
	世話人	結婚相手の決定
		こぶし固め
		結納おさめ
		嫁入り
	入家の儀礼	三三九度の盃
		役人づとめ
		婚礼の祝宴
		里帰り
	婿入り	初鏡
		離婚
		結婚の贈り物
		嫁と婿の服装
		婚礼の料理
第三節	葬制	848
	死亡	葬式組
		湯灌・納棺
		通夜
		香典
		内吊い・外吊い

野送り 土葬 野帰り 仕上げの膳 寺仕上げ参り 忌いひ 年忌仏事

あとかき……………855

付録

図・表・写真一覧……………26

歴代首長・議長・議員名簿……………25

豊岡市史年表(明治から現在まで)……………18

題字 前豊岡市長 故橋本省三 筆